

**P3**

**手話言語の文法における顔の表情：「平らな顎」は何を意味するか**

ローレン・ニコライ、ロニー・B・ウィルバー  
(パデュー大学 [アメリカ])

**要旨**

これまでの数十年にわたる研究にも関わらず、アメリカ手話の、そしてそれ以外の多くの手話言語の構造の大半は、なお調査を必要としている。十分な調査を必要としている分野のひとつが非手指動作である。これは手話言語にとってはきわめて重要な要素であるが、いまだ理解が進んでいない。本研究では、非手指動作の動作単位17 (Ekman & Friesen 1978) がアメリカ手話において果たす機能を観察する。動作単位17は、不満で口を尖らせる時のように顎のオトガイ筋を用いて発する動作である。先行研究では、動作単位17は不快感を表す際に文化を問わず用いられるとする示唆 (Ekman et al. 1969) があり、また、アメリカ手話では否定の表現と関係があると見られる (Benitez-Quiroz, Wilber & Martinez 2016)。我々は、ビデオシリーズ “The Faces of ASL” (『アメリカ手話の顔』) から得られた証拠をもとに、動作単位17には3つの機能があると仮定する。第一に、話者による評価を表現すること、第二に、詳細を述べること、そして第三に、特定の単語の標識として用いられることである。話者による評価を表現する場合、動作単位17は節全体に重なるように発せられる。たとえば、「感じる・同じ・終わり」(やり終えて、それを同じように真似できたと感じたら) では、練習文を満足に真似できたか否かの不確信を話者が表現している。次に、詳細の種類を表す類別表現や手話単語にも動作単位17が添えられる。たとえば、「いま・ビデオテープ・分ける・いくつか・類別1+5『多くの部分』・切る」(さて、このビデオテープはいくつかの部分に別れています) では、このビデオが小さな部分へと分けられていく様子を示す類別表現が動作単位17を伴っている。最後に、“I miss you” (きみが居ないと寂しい) と言うときの MISS (不在を惜しむ) は、一貫して動作単位17を伴っており、感情表現として固定化されているものと思われる。以上のデータから、アメリカ手話に現れる動作単位17は否定以外にも3つの機能を持つと言える。さまざまな動作単位に対して我々が行う分析は、究極的には手話の自動翻訳アルゴリズムの設計や手話通訳の正確さの向上にも役立つであろう。

**参考文献**

Benitez-Quiroz, C. F., R. B. Wilbur, & A. M. Martinez. 2016. The Not Face: A Grammaticalization of Facial Expressions of Emotion. *Cognition* 150: 77-84.

ニコライ、ウィルバー：手話言語の文法における顔の表情：「平らな顎」は何を意味するか

Ekman, P. & W. V. Friesen. 1978. *Facial Action Coding System: A Technique for the Measurement of Facial Movement*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.

Ekman, P., E. R. Sorenson & W. V. Friesen. 1969. Pan-Cultural Elements in Facial Displays of Emotion. *Science* 164(3875): 86-88.